

今はリフォーム中……⁽¹⁾

キム ラックウ
金 洛佑

ムン キョンナミ
(文 景楠 訳)

私は精神障害当事者の^{キムラックウ}金洛佑です。まず私自身についてご紹介申し上げます。私は実業系の高校を卒業しました。生産職で働き、自動車と家電の販売をしていました。今は49歳です。2000年12月に初めて精神分裂⁽²⁾を患い、その後幾度か再発を繰り返し今にいたっております。この原稿では、以下の順序で私のお話をしたいと思います。

1. 分裂が来る時
2. 誰が私を助けてくれただろうか？
3. 今はリフォーム中…

1. 分裂が来る時

今私は、私自身の生活を改善しております。それに関してご説明差し上げるために、私が精神分裂とかかわり始めてから今に至るまでの経験をお話したいと思います。

精神分裂が起こった時、私は眠ることができませんでした。2000年の11月頃、私は失恋し、数年間放置して廃屋同然だった実家に戻ってありました。仕事は多忙で、不眠の夜が続きました。症状が始まってからというもの、最初は軽症でしたが段々と私の魂と精神がそれに影響されるようになりました。具体的には、「お前の目を通して全部見ているぞ」、「タクシーから飛び降りなさい!」、「お前は私の息子だ」といったような幻聴が聞こえるようになりました。

その後入院することになり、2ヶ月後に退院することができましたが、その数ヶ月後に再発しました。この時も「お前は俺のものだ」、「自動車にぶつかって賠償金を受け取れ。怪我はなんとかしてやる」といった言葉や「サマッディーサマッディー」といった呪文が聞こえました。次に、このような幻聴に対する私の気持ちがどのような仕方(妄想)で変化していったのかを、その進展に沿ってお話申し上げます。

最初は、それはとても小さなエイリアンの言葉のようで、私は好奇心をもちました。数日後には、幻聴同士の話しあい「私たちの言葉が彼には聞こえてるみたいだよ」といった仲間内の会話に聞こえてきたので、私は不思議がりながらもそれらに語りかけようと試みました。次第にそこには知人たちの会話加わるようになり、今度は私は自分に読心術の能力が芽生えたのではと思うようになりました。次の段階では、異端の牧師から「俺のことを知ってるでしょ？」という呼びかけがあり、私はそれを遠方にいる邪悪な能力者の呼びかけと感じました。さらにその声（幻聴）はキリストの遺伝子に関して語り始め、私は半信半疑ながら自分は選ばれたものなのではと考えるようになりました。

あるときには、声は家族や知人を皆殺しにすると脅迫し、その妥協案として、私が盲人になれば許してやると語りました。この頃は、こういう悪の声に追い回されているのだから、私自身はきっと善なのだろうと思うようになりました。

地球を破滅させる呪文が繰り返し聞こえ、破滅だけは防がなければならないという奇妙な使命感をもったこともありました。私のせいで伝染病と神の裁きが行われていると言われ、自分は神から捨てられたと思って自殺も考えました。

しまい（入院直前）には、「今までのことは、すべて金洛佑に対する試験だった。よく耐えたな！教団の総裁はお前だ！」という声が聞こえ、つらい状況は終わったのではないかと嬉しくなり期待感をもつようにもなりました。しかし、まさにその日に私は入院することになりました。図1は、再発が起こった時、地下では幻聴が聞こえないかもしれないと考え、マンホールの下に逃げこんだ記憶を描いたものです。マンホールのなかでも幻聴が聞こえてきたので、非常に恐ろしい思いをしました。



【図1】⁽³⁾

私はいくども入退院を繰り返しました。症状が始まったのが2000年12月で、初回の入院が2001年の2月、二度目の入院が同年6月、三度目が2003年3月、四度目が2003年12月で、最後に退院することができたのが2004年3月です（発病後、3回も再発しました）。最後に幻視を見たのは2004年11月ですが、このときは入院には至りませんでした。頻繁に入退院を繰り返したので、病識ができたのです。

ここで少し別の話をしたいと思います。私は実は猫が好きで、猫が登場する随筆を書いて作家としてデビューを果たしました⁽⁴⁾。猫が好きな人で精神分裂を患った人に、ルイス・ウェインという人がいます。彼は57歳で精神分裂を患うようになりましたが、もともと猫の絵を多く描く画家で、病気になったあとも、自分に見えている猫の姿がどのように変化していったのかを絵に描いて残しています。病気のせいだと思われそうですが、彼が描く猫は、時とともに抽象的なものになって行きます。

症状の初期に描かれた絵のなかの猫は、確かに幻想的ではありますが、可愛らしい相貌をしています。反面、症状の末期に描かれた絵は、もはや猫の絵だということがわからないほど、おどろおどろしいものになります。ちょうどその中間の時期、ある程度症状が進行した後に描かれた絵では、悪意に満ちた笑を浮かべた凶暴そうな猫が描かれています。そして、私にも猫がこの絵のように見えた時期がありました。猫が私を嘲笑うように見えて、本当に恐ろしかったです。現在は、先ほど申し上げました通り、猫で随筆を書くほど回復し、トラウマは残ってません。

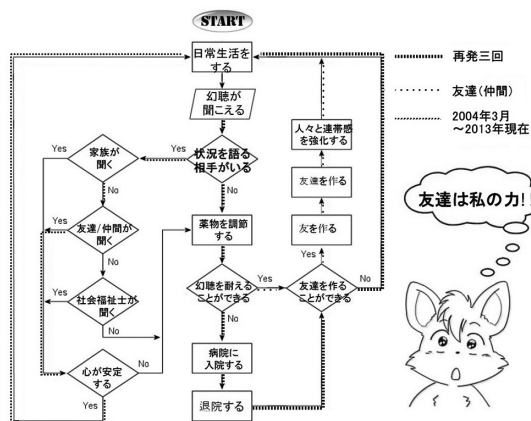
2. 誰が私を助けてくれただろうか？

次に、辛かった時に私を助けてくれた人々の話をしたいと思います。彼らは、私にとっては主イエス・キリストに似た人々でした。まず、煎餅屋と中華食堂の主人、老人ホームや韓国食堂の人々は、私が食べるのに困っていたときに食事ができるように配慮してくれました。

病院で出会った痛風を患っている兄と癩癩もちの弟（実の兄弟ではありません）は、心からの助け合いとはどういうものかを教えてくれました。二人は他人同士ですが、弟のほうは体の半分が麻痺している兄を目が覚めてから眠るまで誠心誠意助けてくれました。弟は、寝る前に兄が一日身に着けていた下着や靴下を洗濯してから干し、朝は綺麗に乾いた服を着せ、洗顔を手伝い、シャンプーとお風呂、食事を助けてくれました。さらに、兄の体が完全に固くなってしまわないようにと食事後30分ぐらい手をとって運動するのを助けてくれました。度々自身の発作に苛まれながらも、彼はそれを続けました。同じ病室の患者を助けたからといって、何か代価

を受け取るわけではありません。病院で同僚患者のこのような姿に接して、私もその弟のような心をもって誰かを助けたいと思うようになりました。非常によい影響を受けたと思います。家族や友人、精神保健センターや社会復帰施設の人々にも助けられました。

精神障害者仲間からは特に多いに助けられました。図2は仲間が私にとってどのような仕方であって助けているのかを表したものです。注目していただきたいのは、地域における当事者仲間（友達）を作ることができ、その仲間と時を過ごすことで、病と自分の症状について語るようになり、入院しないようになったという点です。図2での「再発三回」のとなりの線は三度の再発の経緯を示すものですが、ほとんど家に引きこもって異常な行動をし、入院するというパターンを表しています。当時は、家族や周辺の人々に私の状況（症状や幻聴）を話したことはありませんでした。最後に退院した2004年3月以降は、地域の当事者仲間と親しくし、幻聴の中身を話しながら生きてきました。毎日出会う同僚は、私から普段と違う何かを感じた時に私に助言することができるし、自分ではわからない危機（症状）が生じた時に私の代わりに助けを求めることができると信じています。そのためには、次のことが必要です。それは、周りの仲間が私のことをよく理解できるように、度々会い、親しくなり、症状と気持ちを含めた私の現在の状態を積極的に語ることです。親しい仲間が私のことをよく知っているという事実は私を安心させます。これは、図2の「友達（仲間）」のとなりの線が示しているパターンです。今まで私が元気に暮らしてこられた理由の一つは、私の話を聞いてくれる仲間がいたことです。



【図2】

仲間から受けたもう一つの助けは、褒め言葉です。私は、精神分裂に罹る前には褒められたことがほとんどありませんでした。学校では勉強が、職場ではお金を稼ぐことが、30歳を超えたときには結婚がそれぞれできなくて叱られました。精神分裂に罹る前は、自分よりよい境遇にいる人だけを見つめて、つまり上だけを見つめて生きていました。頑張って働いたけど、他人と自分を比べて自らを恥じてました。野宿者や乞食を見ても、彼らを助けるという発想は芽生えませんでした。「探してみればきっと仕事があるはずなのに、なぜ彼らはああしているんだろう？」と思い、ただ彼らのそばを通り過ぎました。自分は正しい生活をしている善人だと思いましたが、自分がこのような劣悪な人生を送っているのは、家庭環境のせいだと思っていました。しかし、幻聴に追われて長い間野宿しながら街をさまよっていた自分の姿から、「世にはどうしようもない状況というものがある！」ということを知りました。そして、まさにどうしようもない状況に陥っていた私にも、先ほど述べたとおり、何の代価も望まず助けの手を差し伸べてくれた人たちがいてくれたのでした。

三度の再発を繰り返した後、地域の保健所で初めて精神障害者の仲間に出会った時、何ももっていない私でも彼らを助けることができるということを知りました。たとえ同じ空間にいるとしても、隣の人に関心をもつこと、先に話しかけること、暖かく接することは、当事者である我々にとって往々にして難しいことです。私も内向きな性格ではありますが、仲間と比べて社会経験は多いほうでした。その意味では私は、先に寄り添い、話しかけたり状況に合った振る舞いをしたりすることに比較的難しさを感じないほうでした。必要だったのは、仲間と親切にし、暖かく接するという心構えでした。地域で初めて仲間に出会ったとき、以前街をさまよっていたときに助けていただいた多くの人々に少しでも恩返しできるというふうに思いました。そうやって、恩を返す気持ちで仲間たちと接するようになったら、彼らは私を褒め、励まし、高く評価してくれました。私は自尊心を回復し、自分にもよい面があるということを知りました。これは、ありのままの自分を好きになるきっかけになりました。仲間が私のことを好きになってくれる、褒めてくれるということが、私には大きな力になったのです。

3. 今はリフォーム中……

幻聴や幻視の世界から自由になった後の、現実と向き合うという作業は、症状を耐えるのと同じぐらい大変でした。それでも、私にとっては人生の再構成という非常にやりがいのある仕事でした。現実における自分の変化、能力の強化に関しては、社会福祉士の方たちとの連帯が非常に大きな役割を果たしました。私が会うことができた社会福祉士の方々は、モチベーションを与えることに関しては

達人です。2006年から2009年までの間、精神保健センターでは、正月や秋夕⁽⁵⁾に行われる伝統行事の司会をし、卓球大会、のど自慢大会に参加しました。忘年会では44歳の年齢で女性アイドルのダンスを踊りましたし、2009年にはリーダーシップトレーニング教育に参加しました。

これらは、とによりでそれらを勧めてくださった社会福祉士の方々のおかげで可能になったと思います。そして、彼らの勧誘に積極的に応えようと努力した私の姿勢が回復に相乗効果をもたらしたのでしょうか。精神分裂以前の私は非常に内向きな人でしたが、最後に退院した後は、そのような性格を変えようと思うようになりました。司会をすることや、卓球大会、のど自慢大会への参加といったことすべてが、私には初めての挑戦だったのです。次の言葉は、精神保健施設を利用しているときの私の気持ちをよく表しています。

「狂ったと思われるときこそ、恥ずかしがったりせず避けたりしない！」

社会復帰施設である「ハンウル地域精神健康センター⁽⁶⁾」では、2010年度リーダーシップトレーニングでソウル地域の幹事を担当し、同時に精神障害者青年リーダー日本研修プログラムの進行も担当しました。2010年には文学教室「ともにする作家の道」で随筆の書き方を学んで登壇し、2011年にも社会復帰施設と連帯して活動しました。精神分裂以前の私は骨の髄まで内気な人だったのですが、役割をこなすことを通じて能力を強化することができ、性格も変えることができたと思います。

図3は、回復の段階を経ることによって、他者を助ける人生を選択することになる過程を描いたものです。もし私が精神分裂を患うことがなかったら、朝から晩まで仕事はしていたでしょうが、自分を恥じながらも、利己的な生活をずっと続けていたと思います。精神分裂は、そのような生活を営んでいた私に、新しい人生を生きるきっかけを与えてくれました。ですので、私は自分の精神分裂に感謝しています。



【図3】

冒頭で申し上げましたように、私は今自分の人生をリフォームしています。私が本当にしたいことは、以下の3つです。

1. 他人の助けになれるような生活
2. 亀ちゃん（私のガールフレンドです）と仲良く暮らす生活
3. 常に我が主イエス・キリストとともにいる生活

そして、今の私のモットーは以下のとおりです。

「精神障害から回復してからしたいことを今練習しよう！そして、練習を実戦のように、実戦を練習のようにこなそう！」

精神分裂とそこからの回復を含め、これらすべてのものを用意してくださいました我が主イエス・キリストに感謝いたします。ここまでお読みくださいますと、本当にありがとうございました。

注

- (1)〔訳注〕本稿は、2013年3月30日から31日にかけて東京大学駒場Ⅰキャンパスで開催された第1回「障害の哲学」国際会議「障害学と当事者研究：当事者研究の国際化に向けて」における発表原稿をもとにまず翻訳者が韓国語原稿の体裁を整え、その原稿を著者に確認していただき、確認していただいた韓国語原稿を日本語に訳出するという手順で行われた。

- (2)〔訳注〕 著者の意向により、本稿では「精神分裂」という表現を使用する。
- (3)〔訳注〕 本文中の図の著作権はすべて金洛佑本人または金洛佑とハンウル地域精神健康センターに属する。
- (4)〔訳注〕 「縁分」『韓国散文』2010年11月号、123-7頁。(新人随筆当選作)
- (5)〔訳注〕 韓国で陰暦の8月15日に行われる祭日。正月と並んで重視される。
- (6)〔訳注〕 한울지역정신건강센터 (<http://1wool.or.kr/index.php>)、ソウル。